

Title	博士論文「キルケゴール青年時代の研究」要旨
Sub Title	Studier i S. Kierkegaards Ungdomstid (excerpts from doctoral dissertations)
Author	大谷, 愛人(Otani, Hidehito)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1969
Jtitle	哲學 No.54 (1969. 11) ,p.223- 228
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	博士論文抜萃
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000054-0223">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000054-0223</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 博士論文「キルケゴール青年時代 の研究」要旨

大 谷 愛 人

この論文は、キルケゴールの思想の基本的構図ができあがった彼の青年時代におけるその生成過程を究明したものであるが、これが根本的に意図するところは、この研究をして日本におけるキルケゴール研究の最も本格的な「基礎的研究」の礎石たらしめようとする点にある。

日本のキルケゴール研究は、その古さといい文献類（翻訳書も含む）の量といい、デンマーク本国を別とするなら、ドイツに匹敵する程である。例えば、キルケゴールの名が日本の書物にはじめて現れたのは、明治39年（1906年）内村鑑三の『聖書之研究』誌六月号の「大野心」という一文と、『早稲田文学』7月之巻の上田敏による「イプセンと」いう一文においてであるが、早くも大正4年（1915年）には和辻氏のあの大著が現れた。この書物は、これ以前のものの中では、ノルウェーのF.ペーダーセン教授の大論文（1869年刊行）を別とするなら、デンマークも含め世界で一番大きいものであった。こうしてこれ以後もひきつづき、とくに戦後の一時期はブームをすら呼んだ程に、夥しい数の論文や翻訳などが出たのである。ところがこのような歴史の古さと文献の多量さにも拘らず、ここつい4、5年以前までは、それらの文献の始んど大部分は、2、3のドイツ語文献を参照してまとめた程度のものばかりであった。しかも、そこで依拠されているドイツ語文献も考えられている程にはそれ程高いものではないのである。このようなわけで、日本には、本格的な「基礎的研究」の上に立った眞の意味での「研究文献」の名に値するものは殆んど見られなかったの

## 「キルケゴール青年時代の研究」要旨

である。そこで、この論文は、そのような日本の学界の状況に対して、本格的な「基礎的研究の」礎石たらんとして書かれたものである。

ところで、「基礎的研究」であるためには次の点が、最低の条件として充されなければならない。この論文は、正にこれを充することを目的として書かれたのである。

第1は、デンマーク語文献(=原典、資料、その他の研究文献)を主体とした北欧語文献(デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語)に基き、しかも徹底的に「第1資料」に基くことである。この論文は、このテーマに関連するデンマーク語文献はのこりなく用い、デンマーク語「第1資料」も殆んどのこりなく用いた。例えば、キルケゴールの通った教会の書類(その1例として聖餐式名簿など)、ラテン語学校や大学の内申書や証明書類、学友たちや親族の者たちが彼について書いた書簡や手記、同時代の新聞記事、キルケゴール家の何代にもわたる詳しい系図、キルケゴール自身の蔵書目録など。こうして、この論文はいかなる些細なことも必ず「第1資料」の裏付けによるよう努力した。

第2は、歴史的状況への相即ということである。キルケゴールの思想は、同時代デンマークの歴史的状況を離れては殆んど考えられないものである。というのは、彼の思想は、単に彼の個人的精神活動によるだけでなく、明らかに同時代デンマークの歴史的状況からの「二重の規定」のもとで生成したと考えられるからである。そこで問題は、その歴史的状況と彼の思想との関係になるが、その関係は決して一様のものではなかった。彼は、一面においては、時代からの規定を直接的にうけ、正に時代の子であったと共に、他面においては、時代に対し、徹底的に、反抗と闘いの姿勢をとっていた。即ち、彼の天才的な頭脳と無限に深い精神とは、時代というものを同時代の誰よりも敏感に感じとり、誰よりも深く呼吸したのである。そのため、一面においては、時代を、同時代の誰よりも直接的に徹底的に反映させたが、それと同時に、誰よりも根源的な批判をし、誰よりも徹底

的に闘つたのである。そして彼は、時代に対するこのような二重の関係において、ますます「精神」となつていったのであり、この「精神」が「思想」として展開されたのである。この意味において「歴史的状況との相即」ということは、キルケゴール研究のためのもっとも基礎的方法として必ずとりあげられなければならないわけである。

以上この論文の方法における二つの特徴について述べたが、更に厳密に言うなら、この二つは表裏の関係をなしているものだということであり、この論文は、この表裏の関係を方法化し貫いたつもりである。

このような意図のゆえに、この方法を具体化するにあたって、論文の全体を3部に分けた。

「第1部」は「歴史的背景」とし、この論文で扱う事項の全体の歴史的背景を究明する個所とした。つまり、この「第1部」は、「第2部」と「第3部」の全体的背景である。従って「第2部」「第3部」の中の個々の事項は、この「第1部」の内容を背景としてはじめて、更にその重要度に従つてそれぞれの個所で詳述されることになるわけである。ところで、この「第1部」は、キルケゴールの思想と生活の全領域に即するため、更に3つの章に分け、「(政治を中心としての)歴史的状況」「教会史的状況」「思想史的状況」となした。第1章では、当時のデンマーク国家及び社会の体制が、他のヨーロッパ諸国との関係とも相俟って、崩壊してゆく過程を詳述したが、これは、この体制と表裏の関係において成立していた「既存の価値体系」が崩壊してゆく過程と構造の特徴を理解するに資するためである。こうして第2章では、「既存の価値体系の保持者」である「教会」の状況を通じて、「価値体系の崩壊構造」の特徴を記述した。第3章は、このような「歴史的状況」と「価値的状況」が「人間」の内部に即して形成している「精神的状況」を究明することを目的とした。その状況は、「ゲーテのファウスト的状況」つまり「懷疑」として規定されるが、キルケゴールは、この状況を更に深くとらえ「アハスヴェルス（永遠のユダヤ人）的状

## 「キルケゴール青年時代の研究」要旨

況」つまり「絶望」としてとらえたのである。しかしこの「第1部」では「価値体系の崩壊構造」が検討されると共に、最後に、それに対して同時代に起っていた「新しい価値体系」を求めようとする運動に3つの方向があったことが指摘される、1つは、自由主義政治運動につらなる人々で、「新しい価値体系」は「大衆」の内部にあるとみなす方向、もう1つは、文学者や思想家たちで、「新しい価値体系」は個人としての「人間」の内部にあるとみなした方向、更にもう1つは、キリスト教界内の動きで、何人かの神学者、牧師、そして信仰グループで、「新しい価値体系」を「新約聖書」の内部に求めようとした方向である。ところでキルケゴールは、この第3番目の方向を、もっとも徹底的な仕方で、ただひとりで、突き進んだのである。何故それは彼にのみ可能だったのだろうか。それは彼にのみ、時代の精神的状況と新約聖書の根源とに、もっとも深く関かはることのできる「思考」と「精神」がそなわっていたからであり、そのような「思考」と「精神」が養われたのは「少年時代」であることが、ここで指摘される。

「第2部」は「少年時代」とし、彼のこのような個人的心理的特質が究明される。即ち、ここでは、1813年5月5日の誕生から1830年10月のラテン語学校卒業までの時期が扱われるが、この少年時代の全体を彼の全生涯の中に位置付け意味付けてみることを目的としている。彼の少年時代は、空間的には、家族との関係における家庭生活と、もう1つは偉大な校長のもとでのラテン語学校での生活として営まれた。しかしこれら2つの領域を通じて、1つの強力な因子が彼の少年時代を規定していた。それは「父ミカエルの秘密と信仰と宗教教育」とであった。この因子が、キルケゴールの内部に、個人的心理的特質としての「憂鬱」を刻印したのであり、この次第が彼の日誌の記事その他あらゆる資料を裏付けとして徹底的に究明される。そして結局「第2部」の結論は、この「憂鬱」こそが彼の「思考」と「精神」に無限に深い運動を営ませる働きをしている、というにある。そこで、彼が、この「憂鬱」を刻印された「思考」と「精神」の無限に深

い運動を通じて、時代の精神的状況を可能な限り深く体现し、もろもろの思想やキリスト教自身を、人間に可能な限りの深みから検証したのが、青年時代になる。

「第3部」は、「青年時代」であり、これがこの研究の究極の対象である。この「第3部」は、1830年11月1日のコペンハーゲン大学入学から1841年9月マギスター学位論文の通過に至るまでの間における彼の思想の生成過程を究明することを内容としているが、それを通じて、「第1部」で述べた問題状況が「第2部」で述べた彼の独特的「思考」と「精神」においてはどのようにうけとめられ、検証され、どのような解決の方向が見出されて行ったか、という問い合わせられてゆくわけである。ところで、この目的を達するために、この「第3部」で直接の研究素材としたものは、キルケゴール自身の「学問研究」である。つまり、彼の「学問研究」のテーマと内容の移行過程を手がかりとしながら、彼の思想の生成過程をとらえようとしたわけである。しかしそれをするにあたっては、彼がさまざまな学者や思想家たちの書物をどのように読み、どのような影響をうけているかをつきとめるため、その一件々々について彼自身の「蔵書目録」を検討することからはじめる方法をとった。さて、この「第3部」の内容をここに展開することは分量から言っても到底不可能であるが、端的に言うならば、次のように言えるだろう。キルケゴールは、「父ミカエルの秘密と信仰」に直接触れてゆく過程の中で、彼の「憂鬱」はいよいよ深まってゆくばかりであり、文字通り「ファウスト的状況」（懷疑）から「アハスヴェルス的状況」（絶望）にまでおちてゆき、そのため彼は、生存のあらゆる領域と思想のあらゆる領域とを周航し、結局身をもって、生存のあらゆる領域（審美的在り方、哲学的在り方、宗教的在り方）と思想のあらゆる領域（文学思想、哲学思想、神学思想）とを、それらの裏の裏から検証し、そして、キリスト教そのものを、更に正確に言うならば、「新約聖書」のキリスト教を、その奥の奥から検証し、証言したのであり、そのような営みを通

## 「キルケゴール青年時代の研究」要旨

じて、「真理」とは何なのかという時代が新たに提起した問いに、身をもって答えることになったのである、と。しかし彼は、「真理」という概念に、従来の哲学が施していた規定とは全く異った全く新しい変更をもたらしたのであり、それは単なる新しい見解と言ったような種類のものではなく、哲学史における新しい時代を画する程の意味をもったものであった。この「第3部」は、大体以上のような意味をもったものである。

この論文は、以上のようなものであるが、この論文の方法に関しては、コペンハーゲン大学の A. ヘンリクセン教授の次のような一言から、深い示唆をうけていることをここで明らかにしておこう。教授はこう言っている「われわれがキルケゴールから多くを得るのは、キルケゴールを語ることによってではなく、キルケゴールと語ることによってである」と。この言葉は、筆者に次のような主体的モットーを生み出してくれた「キルケゴールと語るには、先ずキルケゴールに語らせ、キルケゴールから聞くことをもってはじめなければならない」。この論文は正にこのモットーを微力を尽して忠実に守り、方法において内容において実現したまでである。